今日のみ言葉 232 「よき知らせを伝えるために」 2013.10.09

主なる神の霊が私の上にある。 主は、苦しむ者 (*) に良き知らせをもたらし、
心の壊れた者を慰めるために、私をつかわした。 (イザヤ書61の1)

The Spirit of the Lord GOD is upon me .
He has sent me to bring the good news to the afflicted, to soothe the broken-hearted.

(*) ここで「苦しむ者」と訳した原語(ヘブル語)は、アナーウィームで、本来は圧迫された者を意味する。そこから、苦しむ者、悩む者、貧しい者などと訳される。英訳では、the oppressed (NRS)、the afflicted (NJB) など。 また「壊れた」と訳された原語はシャーバルで、戸を「壊す」(創世記19の9) のようにも用いられている言葉で、「心の傷ついた者」(新改訳)、「心のいためる者」(口語訳) などと訳され、英訳では、 the broken-hearted (NJB他) と多くが訳している。

この旧約聖書の言葉は、キリストが初めて自分が育ったユダヤ人の会堂にて語ったときに読まれた言葉である。そして、「この聖書の言葉は、今日、あなた方が耳にしたとき、実現した」と言われた。 (ルカ4の16-21)

イザヤ書において、キリストよりはるかに数百年の昔、すでにキリストの本質を預言し、じっさいその通りに実現されたことは驚くべきことである。

ここで預言されたキリストは、確かに聖なる霊を受け、その霊によって試練、困難、誘惑にも勝利され、そして、現実の無数の苦しみ、悩む人に、ほかの人間や組織、あるいは学問、科学技術などが決して与えることのできない良き知らせを伝えて来た。

旧約聖書の詩の中に「話すことなく、語ることもなく、声も聞こえないのに、その響きは全地に、その言葉は世界の果てまに向う」(詩篇19) というのがある。

いかに時の権力者がこの良き知らせを信じるキリスト者たちを猛獣と戦わせたり、はりつけにしての処刑、さらには国外追放などしようとも、その良き知らせの響きは途絶えることがなかった。それは、すべてを支配されている神ご自身のご意志であるからだった。

私たちは、生涯のうちで、だれでも苦しみ、悩みあり、また心壊れた状態になる。現在いかに健康でそうした苦しみとは縁のないような人であっても、突然の事故や災害、あるいは重い病気などが生じることもあるし、家庭や職場での人間関係の崩壊…等々なにがおきるか分からないのがこの世である。そのようなとき、元気なときには想像もできなかった孤独や哀しみ、あるいは不安が押し寄せてくる。

キリストは、そうした状況から救いだすために来られたのであった。そのような苦しみの根源に、人間の自分中心という罪があるゆえに、その罪の赦しを告げ、死の力にも勝利する力が与えられる―これは良き知らせの中心に置かれている。

そして、私たちの受ける圧迫、苦しみや悩みに寄り添い、そこに慰めと励ましを与えてくださる。 神はこのように、あらゆる人間の苦しみや悲しみのときにも、そこから救いだされる道を備えられている。数千年ほども昔から 、そのような備えがあるのだと告げられていることは、この不安な定まることのないこの世にあって大いなる良き知らせである。

体の傷は、手術や薬によって多くは癒される。しかし、深い心の傷は、医者も薬も、あるいは学問や知識などもどうすることもできない。それはただ人間を超えた力によってのみ癒される。この苦しみや悲しみ、心の壊れた状態を真に癒すのは、死者をも復活させることのできる神そして、その神のいっさいの本質を受けていまも生きて働いておられるキリストだけである。

野草と樹木たち　ヤマユリ　（山百合）

鳥海山のふもとにて（標高2236m、山形県と秋田県境の活火山。）　2013.7.20 撮影

今年の夏、北海道 瀬棚地域での聖書集会からの帰途、鳥海山のふもとで見いだしたのが、左の百合です。 このヤマユリとカノコユリ、そしてテッポウユリは世界のユリで最も美しいものとして高く評価されているもので、それらから多くの現代の園芸種のユリが作られています。 大型のユリとして知られているカサブランカは、このヤマユリやカノコユリなどを交配して作られたものです。カノコユリの野生種は現在ではごく少なくなっていて、 私はかつて徳島県南部の海岸沿いの山肌に咲いているのを見たことが一度あります。 それに対してこのヤマユリは、東北各地の道路際の日当たりのよいところでよくみられますが、この写真のものは、山道の木蔭に、ある限られた場所に、群生していたものです。

その長い茎、ゆったりとした大型の美しい花、そしてその花びらの模様、さらに香りも強く、花の大きさは直径20cmほどもあります。花の色は白色で花びらの内側の中心には黄色の筋、紅色の斑点があって美しさを添えています。山百合は、明治時代の初期にウィーンの万博で紹介されて注目され、それからヨーロッパに知られるようになったものです。

白いユリは数ある花のなかで、キリスト教においてもとくに復活や純粋、清さのシンボルとして用いられていて、ヨーロッパの絵画にもしばしばユリが記されています。13世紀の画家ジオットや レオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」、エルグレコ他の作品にも見られ、また、主イエスも「野の百合がどのようにして育つかよく見よ」（ﾏﾀｲ6-28）と言われました。

なお、このイエスの言葉にあらわれる「百合」の原語 クリノン（ギリシャ語）は、「花」とも訳されますが、現代の多くの英訳、日本の新改訳、文語訳なども百合と訳しています。 See how the lilies of the field grow .(NIV)

また、讃美歌にも、白百合が、キリストの復活を思い起こさせるというのがあります。

…　うるわしの白百合 ささやきぬ 昔を、 イエス君の墓より いでましし昔を　（讃美歌496）

あるいは、直接にキリストを明けの明星であり、百合にたとえている讃美歌もあります。

…　わがたましいの 慕いまつる　イエス君のうるわしさよ…君は谷のゆり、あしたの星
うつし世にたぐいもなし　（讃美歌512）

このように、ユリの姿とその白い色、さらにその美しさや香りは、古代から、神によって清められた美しい世界―神の国を思わせるものとして、またキリストの復活―さらに死にうち勝つという究極の力をも指し示す重要な意味を含んでいるものとして重んじられてきたのです。

（写真・文ともに T.YOSHIMURA）